

詩篇147篇

《第一部》 贖い給う主

- 1 ハレルヤ。まことに、われらの神にほめ歌を歌うのは良い。まことに楽しく、賛美は美しい。
- 2 主はエルサレムを建て、イスラエルの追い散らされた者を集める。
- 3 主は心の打ち砕かれた者をいやし、彼らの傷を包む。
- 4 主は星の数を数え、そのすべてに名をつける。
- 5 われらの主は偉大であり、力に富み、その英知は測りがたい。
- 6 主は心の貧しい者をささえ、悪者を地面に引き降ろす。

《第二部》 養い給う主

- 7 感謝をもって主に歌え。立琴でわれらの神にほめ歌を歌え。
- 8 神は雲で天をおおい、地のために雨を備え、また、山々に草を生えさせ、
- 9 獣に、また、鳴く鳥の子に食物を与える方。
- 10 神は馬の力を喜ばず、歩兵を好まない。
- 11 主を恐れる者と、御恵みを待ち望む者とを主は好まれる。

《第三部》 満たし給う主

- 12 エルサレムよ。主をほめ歌え。シオンよ。あなたの神をほめたたえよ。
- 13 主は、あなたの門のかんぬきを強め、あなたの中にいる子らを祝福しておられるからだ。
- 14 主は、あなたの地境に平和を置き、最良の小麦であなたを満たされる。
- 15 主は地に命令を送られる。そのことばはすみやかに走る。
- 16 主は羊毛のように雪を降らせ、灰のように霜をまかれる。
- 17 主は氷をパンくずのように投げつける。だれがその寒さに耐ええようか。
- 18 主が、みことばを送って、これらを溶かし、ご自分の風を吹かせると、水は流れる。
- 19 主はヤコブには、みことばを、イスラエルには、おきてとさばきを告げられる。
- 20 主は、どんな国々にも、このようには、なさらなかった。さばきについて彼らは知っていない。ハレルヤ。

【第一部】 贖い給う主（1-6 節）

詩人は、「神にほめ歌を歌う」ことを心からの喜びとして語っています（1 節）。まるで鼻歌まじりに国の復興作業に励んでいるような光景が浮かびます。現実には、瓦礫の片づけや旧邸の探索など、苦しい状況もあったでしょう。しかし、半世紀以上に及ぶ束縛からの解放の喜びが、それらを凌駕していたのです。「自分たちが次の時代を築いていくんだ」という熱気が民の間に渦巻いていたことでしょう。そして口に上ってきたのは、苦しみから救ってくださった神への賛美でした。

「主は心の打ち砕かれた者をいやし、彼らの傷を包む」（3 節）。祖国が破壊され、強制移住を経験した人々の心には深い傷が残されていましたが、主は国の再建とともに、一人ひとりの心にも慰めと癒しを与えてくださいました。「心の貧しい者」（6 節）という表現は、主イエスの山上の説教を思い起こさせます。「心の貧しい人々は、幸いである。天の国はその人たちのものである」（マタイ 5:3）。物質的にも精神的にも打ち砕かれていた彼らは、それでも希望を失わなかった。なぜなら、頼るべきお方、偉大で、力に富み、英知に満ちた主（5 節）がおられたからです。

【第二部】 養い給う主（7-11 節）

各部の冒頭に賛美が置かれている点に注目したいと思います。第一部では「**賛美は麗しい**」とありましたが、第二部では「**感謝をもって主に歌え。立琴でわれらの神にほめ歌を歌え**」（7 節）と語られます。詩篇の多くは伴奏つきで歌われ、「**立琴**」はその代表的な楽器でした。現代ならギターなどの弦楽器にあたります。伴奏者は、心を込めた賛美がささげられるよう、日々練習を重ねています。その献身に支えられ、賛美の交わりが豊かにされていくのです。

8 節からは、神が自然界を養っておられる御業が語られます。雲が天をおおい、雨が降り、山に草が生え、動物たちに食物が与えられる。このサイクルは人間の力を超えて、神の御手によって絶えず繰り返されているものです。

とくに「**鳥の子**」（9 節）が登場する点に目が留まります。カラスと聞くと、ゴミをあさったり、黒くて不気味な存在として敬遠されることも多いですが、神はそのような鳥にも目を留め、養っておられるのです。ヨブ 38:41 にも「**鳥の子らが神に叫び求める**」とあります。神の慈しみは、すべての被造物に及んでいるのです。

そして 10～11 節では、人が頼りとする馬の力や歩兵の強さではなく、主を恐れ、恵みを待ち望む者を神は喜ばれると語られます。力によらず、霊によって生きること。ゼカリヤ 4:6 の御言葉が思い出されます。これは、神殿再建期の民に対する根本的な生き方への指針でもあります。

【第三部】 満たし給う主（12-20 節）

第三部も賛美の呼びかけで始まります。「**エルサレムよ。主をほめ歌え。シオンよ。あなたの神をほめたたえよ**」（12 節）。これは民全体に向けられた呼びかけであり、神の祝福への応答です。13～14 節には、城門が強められ、子らが祝福され、国境に平和があり、最良の小麦で満たされるという恵みが描かれます。これらはすべて、主に依り頼む民への報いとして語られているのです。

続く 15～18 節では、再び自然界の動きに神の摂理が表されています。雪、霜、雹などが美しい比喻で表現され、すべてが神のことばに従って動いていることが語られます。主が御声を発せられると氷が溶け、水が流れ出す——このような自然の営みの中に、神の力と優しさが息づいています。

そして最後に 19～20 節。イスラエルが特別に神の律法と裁きを託された民であることが語られます。「**みことば**」「**おきて**」「**さばき**」という三つの言葉を通して、神の御心を知り、それに従って生きることの幸いが示されているのです。神の民は、自然界と同じように、その摂理に身をゆだねて生きればよいのです。

【結び】

私たちが生きる日本社会は、導入期・成長期・成熟期・衰退期を経て、今まさに混乱期に差しかかっているように感じられます。こうした時代には、しばしば政治の腐敗や生活の困難が起こります。そのような時だからこそ、私たちは主の御手に立ち返るべきではないでしょうか。

詩篇 147 篇は、希望が見えにくい時代にあっても、天地を養い、人の心を癒し、民の生活を満たしてくださる主の確かな働きを証ししています。信仰をもって生きる道が、今を生きる私たちにもしっかりと示されているのです。